

中世の流行病「三日病」^{やみ}についての検討

中村 昭

はじめに

鎌倉室町時代を中心として三日病^{やみ}という流行病が種々の記録類に現われている。これが伝染病であったことは間違いないと思われるが、現代の何という疾病に相当するのか検討するのが本稿の目的である。簡単に考えれば江戸時代以来現代まで残っている三日はしか⁽¹⁾という名称、即ち風疹のことではないかということが思いつく。富士川の『日本疾病史』⁽²⁾でも風疹の項で三日病を取り上げている。筆者も第八五回日本医史学会総会で『多聞院日記』に現われる伝染性疾患の検討⁽³⁾という発表を行なった際には、この日記に現われる三日ヤミを一応風疹と考えた。しかし、その後他の資料も読み『多聞院日記』⁽⁴⁾もよく読み直して見ると、必ずしもそうとは言えないことに気がついた。結論から述べてしまえば、三日病は流行性感冒と考える方が適當⁽⁵⁾であると思われる。以下、その検討結果である。

一 諸記録に現われる三日病の検討

鎌倉幕府の公式記録である『吾妻鏡』⁽⁶⁾の寛元二年（一二四四）四月二十六日に次の様な記事がある。

「是の近日咳病温氣流布し、貴賤上下之を免るる無き間、將軍並びに公達以下御祈禱也。両若君此の御患有り、若君今に御平滅無し。」

更に五月十八日には次の様に記されている。

「前大納言家並びに新將軍御不例。御心神殊に違乱云々。此の外、二位殿、三位殿、同じく煩わせ給う。凡そ近日人毎に此の病の事有り。俗に三日病やみと号なづく。」

この兩日の記事は同じ疾患のことを述べていると思われる。咳病温氣が貴賤を問わず流行し、世間ではこれを三日病と呼んだのである。『武家年代記』^(四)ではこの時期四月から六月まで疫病があつたことを次の様に述べている。

「四月より六月に至り大いに疫す。鬱陀鬼なづと号く。十歳以上の者此の病を受けざる無し。」

鬱陀鬼なづというのはこの疫病につけられた綽名である。同じ時期の流行で『百鍊抄』^(五)は次の様に記している。

「五月六日、主上御不預、近日天下貴賤、兩三日病悩す。一人も之に漏れず。世以て内竹房なづと号く。」

内竹房とは意味不明だが、やはり同じ流行病につけられた綽名であろう。この流行の状況、咳病と言っていること、発疹の記述がないことなどから、風疹よりも流行性感冒と考えるのが妥当と思われる。

更に鎌倉時代末の延慶四年（一二三二）、正和五年（一二三六）、室町時代の天授四年（一三七八）、応永三十五年（一四二八）、寛正四年（一四六三）等にも三日病流行の記録がある。^(一)

延慶四年の流行は『武家年代記』^(四)によると、西日本から東日本へ蔓延して行き、この病氣のあまりの猛威の為に改元されて応長元年に変わったということを次の様に述べている。

「三月中旬以後五月中に至り三日病平均也。鎮西より京都に至り、関東より奥州に至る。都鄙甲乙人脱まぬかるる人少なし。病多々云々。之により改元さる。」

正和五年のそれは『鎌倉年代記』^(六)に次の様に記されている。

「五月より九月の比迄、三日病流布す。」

応永三十五年のそれは『薩戒記』に次の様に書かれている。

「四月十八日、頃日天下疫を疾み、世俗三日病と称す。凡そ遺漏無し。古来未曾有と云う。」

遺漏なしというのは罹患しない人はないということで、Pandemicである。古来未曾有ということは無いのだが、数十年間隔で大流行するので前回の記憶が薄れているのであろう。三十五年続いた応永の年号もこの年に改元されて正長元年となった。

二 『多聞院日記』に現われる三日病の検討

『多聞院日記』は室町時代末期から安土桃山時代にかけて奈良興福寺の子院の多聞院で記されたもので、当時の世相等について知ることができる貴重な資料である。日記を書いている僧は医薬にも関心があったので、寺院内外の疾病についても記述する所が多い。三日病に関しても何カ所か具体的な記述があるので、摘出して検討を加える。

先ず永祿九年（一五六三）三月二十三日の記事。

「此比國中一円爰元悉く三日病風氣はやり漏るる人無し。」

この文章を見ても三日病というのは風に類する病気で大流行したことがわかる。

次に天正十四年（一五八六）四月二十八日。

「此比京・大坂以ての外風氣増倍し、爰元も三日ヤミ少々之在り。」

これでも同じことが言える。この日記の筆者に続いて寺の関係者も次々と風症状を起して来る。

「五月三日、弥三俄に今朝より咳気煩う。」

「五月八日、藤松・春松風氣煩う。弥三今に験無し。有梅の葉申し出る。」

験無しとは病状が改善しないということである。それで有梅軒という開業医に薬を求めたのである。

「五月九日、長善房煩う。葉有梅より取る。」

この有梅軒には次の様に二ヶ月後に葉代として味噌を送っている。

「七月八日、長善房・弥三、三日ヤミ葉代にミソ一桶有梅へ遣わせり。」

これらの記録を見ても、咳気、風氣といった感冒の症状を三日ヤミと言っていたことがわかる。

この同じ流行期の五月二十日には次の様な挿話も記されている。

「番匠の一臈助ちゅう二郎八十余か、以ての外老屈腰立たず、既に此こゝろ比煩い、今明の間一臈俄に辞退、平二郎へ渡し了んぬ。

則ち一臈祝儀沙汰を成せし処、助二郎煩は此頃はやる三日ヤミにて減の間、又一臈の事何かと申すことと在ると雖も、既に旧記以下箱を渡し、惣へ祝儀仕る上は返すべからざる定め也と。抑宿縁の有無悲喜相伴う事なり。」

つまり、宮大工の棟梁が老屈の為に腰が立たなくなったと思つて、その地位を譲つてしまつた処、流行の三日ヤミが原因だったのですぐに回復してしまい、もう一度復帰したいと言つたが駄目だったという悲喜劇を記したものである。これを見ても言う所の三日ヤミは風疹ではなく流行性感冒と思われる。風疹は若年者に多くしかも全身症状は軽く、通常腰が立たなくなる様なことはない。

次に文禄二年（一五九三）十二月から翌年一月にかけての三日ヤミの大流行について述べる。この時は高齢者で死亡する者が多かった。

「十二月二十三日、石風呂申し付く。世上三日ヤミはやり入り手少なし。天下一同と云う。不思議の事なり。」

石風呂というのは蒸し風呂である。蒸し風呂を立てたが三日ヤミに罹っている人が多くて入り手が少ないということである。

「十二月二十五日、南井坊頰い以ての外大事、必死たるべき由、今朝法印御出で語らる。沈思々々。三日ヤミ天下一同にはやると云々。坊中悉くやみ了んぬ。」

まさに pandemic である。中には重症化し、死亡する者もあった。

「十二月二十七日、金勝院も頰う。三日の重きもの也。南井坊少し甘し、大事々々。」

「十二月二十九日、南井坊英印権大僧都入滅、七十五歳。」

年が改まり文祿三年となり、金勝院の頰は続いている。南井坊も金勝院もおそらくインフルエンザから肺炎等の併発症を起したものと思われる。

「一月十一日、金勝院へ北法印見廻られし処、莫大に減なり。一向不食、此の義までなり。薬加味して遣わすべき由仰せ、尤も珍重々々。」

北法印というのは医師であり、金勝院に往診をしたのである。病状軽減したが食欲がないということである。

「一月十六日、北法印御尋ねにて金勝院脉少し甘し。食事もしづづ之在り云々。珍重々々。」

ということでは金勝院は快方に向かった。

「一月十七日、備前衆相待つ所上らず、はやる咳気頰うか、不審々々。」

まだ咳気を頰っている人もいるが、この辺でこの時の三日ヤミ風気の大流行は終熄に向かった様である。しかしこの時期に高齢者の死亡が多かったことを、伝聞などを交えて次の様に記している。

「一月十八日、京には東福寺竜吟・九條禅閣様八十七歳・道三名医九十三とやらん、以上死去、木津甚兵衛父新二郎大夫八十八歳正月六日死。年寄衆悉く以て死す。」

曲直瀬道三の死去の月日をここでは記していないが、他の記録によればこの年の一月四日に死亡している。ただし年齢の九十三というのは間違いで、正しくは道三は八十八歳で死んだということを後で医師の北法印から聞いて訂正してい

る。道三もおそらくこの時の流行性感冒の犠牲になったのであろう。年寄衆悉く死す、とはすさまじい。インフルエンザが流行した年には統計上高齢者の超過死亡が起るのはよく知られている事実である。^(九)

三 流行性感冒と風疹についての検討

三日病がインフルエンザであるとして、何故そう呼ばれたのか。それは経過順調の場合インフルエンザの発熱期間が平均三日間であった為と思われる。現代のほとんどの成書にインフルエンザは二乃至四日で下熱すると書かれている。^(一〇)
Kilbourne はインフルエンザについて英語で“three-day fever” という言い方を紹介している。ただし最近はや予防や治療の影響でこの型も崩れているであろう。

富士川は『日本疾病史』^(一一)において、三日病は流行性感冒の可能性もありとしながら、一応風疹の項で取り上げ次の様に述べている。

「三日病と名づけられたるものは果して何の病なりしか。その大流行的なるより推せば或は流行性感冒を含みしか。或は後の代に三日麻疹^{はしか}（すなわち風疹）というものと同一の症なりしか。」

服部敏良氏は『室町安土桃山時代医学史の研究』^(一二)において、この時代の日記記録の類を検討した結果、三日病は風疹ではなくインフルエンザであろうと述べている。筆者もこれを支持するものであるが、服部氏は最近刊行された『日本史小百科、医学』^(一三)では風疹の項で三日病を三日はしかであるとして記述している。氏の考えが何故この様に変ったかはわからないが、小百科という本の性質上あえて自説を立てず、富士川の『日本疾病史』に従われたのであろうか。しかし、富士川氏はどちらとも決めかねていたものであり、寛元二年の流行の記事などは風疹と流行性感冒の両方に載せている。

もちろん往時三日病と言われたものの中から完全に風疹を除外することはできないであろうが、これまでの論述からい

インフルエンザの可能性がより大であることは了解されるであろう。

ただ中世にだけこういう呼称があつてその後廃れた理由はわからないが、江戸時代の元禄―享保頃の考証家の天野信景は三日病という名称を知つていて、随筆集『塩尻』^(一三)で宝永・正徳の疫病について記述した際に、これが三日病というものであるかと次の如く記している。

「此の間天下庶人三日疾の咳流布す。今時も一兩日人の病む事あり、三日疾というべきかも。宝永四年の冬、富士山焼し比、三四日の咳病を煩しもの天下に多かりし。」^(一四)

これはおそらく流行性感冒であろう。富士川によると流行性感冒という病名は明治二十三年にインフルエンザが大流行した時に作られたということであるが、江戸の考証学派多紀元堅は『時還読我書』^(一四)の中でこの言葉を次の様に使っている。

「文政四年ノ二月中旬ヨリ都下感冒流行シテ闔家コトゴトク枕ニ就ニ至レリ。西国ニテハ去冬ヨリ行レテ邪氣盛ニシテ久解セザルモノアリト。蓋シ近年感冒ノ流行病者ノ夥キコト是歳ノ如キハ曾テ見及バザルホドノコトナリキ。」

感冒という言葉は漢方医学の中にあつた。明の呉有性は『温疫論』^(一五)の中で傷寒の軽いものは感冒であると言っている。又『多聞院日記』^(一六)には風気傷寒という言葉もあり、感冒が悪化して傷寒になるという考え方があつた様に思われる。

それはさて、多紀元堅は右の如く感冒の流行について述べているが、三日病という言葉には言及していない。おそらく元堅の頃にはこの言葉はもう廃れていたのであろう。その代りというわけではないが、三日はしかという言葉がこの頃から現われており、これは次の元堅の文章にも見られる様に風疹のことであると考えて良いと思われる。^(一四)

「天保六年十二月中旬ヨリ、都下風疹大ニ行ハル。其初寒熱甚シクシテソレヨリ周身赤癩ヲ発シ、恰モ麻疹ノ如ク、不食咽痛殆ド麻疹ニ似タリ。軽キハ一二日、重キモ四五日ニテ快復セリ。俗呼ンデ三日ハシカ又ハシカ風ト称セリ。」

結 び

以上、中世の記録に屢々現われる三日病かみふという流行病は流行性感冒であろうと推定し、関連事項に検討を加えた。また、有名な曲直瀬道三は文禄三年一月、この病気の流行の際に死亡したことを述べた。

参考文献

- (一) 富士川游 日本疾病史 平凡社 昭和四四年
- (二) 多聞院日記 角川書店 昭和四二年
- (三) 吾妻鏡 日本古典全集刊行会 大正一五年
- (四) 武家年代記 続史料大成 臨川書店 昭和五四年
- (五) 百鍊抄 古事類苑、方技部、疾病三より 吉川弘文館 昭和五二年
- (六) 鎌倉年代記 続史料大成 臨川書店 昭和五四年
- (七) 薩戒記 古事類苑、方技部、疾病三より 吉川弘文館 昭和五二年
- (八) 矢数道明 初代曲直瀬道三の没年考 日本医事新報 二六五二号 昭和五〇年
- (九) 山本俊一 疫学各論 文光堂 昭和四五年
- (一〇) Kibourne, E.D.: *Influenza. in Cecil-Loeb's Textbook of Medicine, 13th ed., W.B. Saunders Co., (1971)*
- (一一) 服部敏良 室町安土桃山時代医学史の研究 吉川弘文館 昭和四六年
- (一二) 服部敏良 日本史小百科、医学 近藤出版社 昭和六〇年
- (一三) 天野信景 塩尻、古事類苑、方技部、疾病三より 吉川弘文館 昭和五四年
- (一四) 多紀元堅 時還読我書 杏林叢書 上巻 思文閣 昭和四六年
- (一五) 温疫論 評注 人民衛生出版社 昭和六〇年

An Inquiry into Mikka-yami (Three-day Disease) which Appeared in Medieval Japan

by Akira NAKAMURA

We find the word, "mikka-yami" (three-day disease) not infrequently in chronicles and historical writings of the Kamakura-Muromachi period. What does "mikka-yami" mean in modern medical terms?

The Azumakagami describes the prevalence of coughs and fever in epidemic fashion from April to May of 1244 A.D. and comments that people called this disease "mikka-yami". The Buke-nendaiki describes how "mikka-yami" marched from western Japan to eastern Japan in a violent pandemic pattern in 1311 A.D.. In the late sixteenth century the Tamon-in-nikki also describes "mikka-yami" as demonstrating symptoms of the common cold or influenza, and comments that many elderly persons died in these epidemics.

In the Edo period the term "mikka-yami" disappeared, and the term "mikka-hashika" appeared. What do the words, "mikka-yami" and "mikka-hashika" mean? The author presumes "mikka-yami" to be influenza and "mikka-hashika" to be rubella.